

「知らない」では済まされない 現実がここに

中野 理恵

日々、身に纏うファッショナブルな衣服や、口にするパリエーションに富んだ美味しい食べ物。だが、それらの製造や生産の背景に思いを至らせるのは稀だ。衣服では、バングラデシュが“世界の縫製工場”の役割を果たしている事実が、2013年4月24日に発生したラナ・プラザの崩落事故により、世界的に知られることとなったが、水産物については、あまり知られていない。

本作は、日本人の大好きな魚が、タイの海洋労働者、〈海の奴隷〉と呼ばれる人々の劣悪な労働環境（時によるとタダ同然で働かされている）の犠牲の上に、私たちの食卓に届けられている事実を綿密に取材したドキュメンタリー映画である。世界有数の水産大国タイにはそのような〈海の奴隷〉が数万人いると言われている。その奴隷労働を終わらせるために、ひとりのタイ人女性、パティマ・タンブチャヤクル（2017年ノーベル平和賞候補）が、自らも11年間に渡り〈海の奴隷〉だった男性トゥン・リンたちとともに立ち上がり、困難に直面しながらも、タイ船籍の漁船から逃げ出した漁民たちを救うための航海に漕ぎ出してゆく。

ミャンマー生まれの男性トゥン・リンは14歳で誘拐され〈海の奴隷〉として、時によると一日20時間も海洋労働に従事させられ、事故により片手の4本の指を失ってしまった。あるとき、漁船から飛び降り、海を漂流してインドネシアのアンボン島に流れ着き、現地の女性と家庭をもつことに。その後の2014年に、パティマと出会い、彼女の支援によりミャンマーに帰国。かつて自分を雇用していた会社から、事故の補償金を受け取ることができ、現在はパティマとともに労働権利推進ネットワークで活動しているとのことだ。

決して楽しい映画ではないのだが、未知の出来



©Vulcan Productions, Inc. and Seahorse Productions, LLC.

事の連続に驚きながら、思わず見入ってしまった。海上撮影も含めて、製作スタッフの苦勞に思いが至る。監督は米国人ジャーナリストのシャノン・サービスと、同じく米国人フィルムメーカーのジェフリー・ウォルドロン。

私自身、育った町は駿河湾に近かった。昼食時には、駿河湾の海から、朝水揚げした近海魚をリヤカーで行商に来る〈メガネのオバサン〉から購入し、鰯の場合は生姜とともに〈鰯のたたき〉にして、家族で美味しく食べた。大漁のとき、駿河湾には大漁旗を翻した漁船が数十艘も停泊し、壮観だった。魚は日常生活に溶け込んでいた。そんな風景を見慣れて育ったので、今、東京に暮らし、魚屋やスーパーで購入する魚が、もしかすると遠いタイから来ているのかもしれない、しかも、それらを捕獲する漁師が〈現代の奴隷〉状態に置かれている、と知ったのは驚きだった。そして、〈知られざる闇〉は日々の暮らしの他の場面でも、起きているのかもしれない、とも思う。

《Cinema Information》

『ゴースト・フリート 知られざる シーフード産業の闇』

アメリカ映画(90分) / 監督: シャノン・サービス、
ジェフリー・ウォルドロン / 5月28日(土)よりシア
ター・イメージフォーラムほか全国順次公開

なかのりえ: 映画プロデューサー、ディストリビューター。
(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品
として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著
書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。